

# Asia Indicators

発表日: 2019年4月12日(金)

韓国、若年層の雇用のミスマッチは依然大きい(Asia Weekly(4/8~4/12))

~シンガポール景気の今年の出だしは予想以上に弱い展開~

第一生命経済研究所 調査研究本部 経済調査部  
 主席エコノミスト 西濱 徹(Tel: 03-5221-4522)

## ○経済指標の振り返り

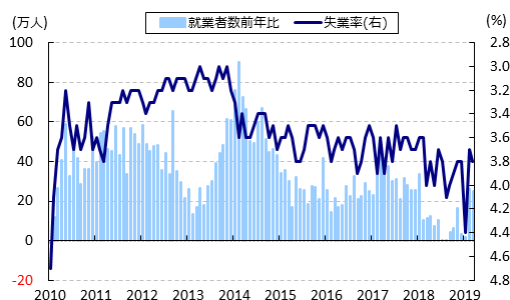
発表日	指標、イベントなど	結果	コンセンサス	前回
4/8(月)	(台湾)3月輸出(前年比)	▲4.4%	▲8.3%	▲8.8%
	3月輸入(前年比)	+6.6%	▲12.6%	▲19.7%
4/9(火)	(台湾)3月消費者物価(前年比)	+0.58%	+0.60%	+0.23%
4/10(水)	(韓国)3月失業率(季調済)	3.8%	3.9%	3.7%
4/11(木)	(フィリピン)2月輸出(前年比)	▲0.9%	+0.6%	▲6.7%
	2月輸入(前年比)	+2.6%	+6.0%	+3.6%
	(中国)3月消費者物価(前年比)	+2.3%	+2.3%	+1.5%
	3月生産者物価(前年比)	+0.4%	+0.4%	+0.1%
	(マレーシア)2月鉱工業生産(前年比)	+1.7%	+2.2%	+3.2%
4/12(金)	(シンガポール)1-3月実質GDP(前年比/速報値)	+1.3%	+1.4%	+1.9%
	2月小売売上高(前年比)	▲10.0%	+2.5%	+7.6%

(注) コンセンサスは Bloomberg 及び THOMSON REUTERS 調査。灰色で囲んでいる指標は本レポートで解説を行っています。

### [韓国]~若年層の労働市場への参加意欲はうかがえるが、雇用を巡るミスマッチ解消は難しい状況が続く~

10日に発表された3月の失業率(季調済)は3.8%となり、前月(3.7%)から0.1pt悪化した。失業者数は前月比+2.5万人と前月(同▲19.2万人)から2ヶ月ぶりに拡大に転じており、年代別では50代以上の高齢層や40代で縮小する一方、20代や30代など『働き盛り世代』を中心に拡大するなど、年代ごとに対照的な動きがみられる。一方、雇用者数は前月比+2.9万人と前月(同+13.7万人)から3ヶ月連続で拡大しており、60代以上の高齢層で縮小する一方、10代や20代の若年層や30代で拡大するなど改善しており、中期的な基調も拡大傾向が続いている。ただし、雇用形態別では正規雇用者以上に非正規雇用者を中心に拡大する動きが鮮明になり、労働者全体に占める非正規雇用者の割合が上昇する動きもみられる。なお、労働力人口は前月比+0.5万人と前月(同▲0.6万人)から2ヶ月ぶりに拡大に転じており、年代別では60代以上の高齢層で縮小する一方、若年層や働き盛り世代で拡大するなど対照的な動きはみられるが、中期的な基調は拡大傾向が鈍化するなど頭打ちしている。こうした動きを反映して、労働参加率は63.4%と前月(63.3%)から0.1pt上昇しており、若年層や働き盛り世代を中心に上昇する動きがみられる。ただし、10代及び20代など若年層に限れば失業率は9.2%と前月(7.7%)から大幅に悪化しており、雇用を巡るミスマッチはなかなか解消しないなど、文政権による『所得主導成長論』に基づく取り組みが依然効果を挙げていない状況もうかがえる。

図1 KR 雇用環境の推移



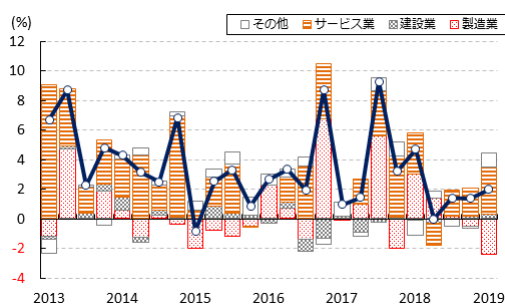
(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

### [シンガポール]～世界経済の減速懸念が製造業の生産の重石となるなど、景気は厳しい状況に直面～

12日に発表された1-3月の実質GDP成長率(速報値)は前年同期比+1.3%と前期(同+1.9%)から鈍化して、世界金融危機の影響が色濃く残った2009年4-6月以来の低い伸びとなった。前期比年率ベースでは+2.00%と前期(同+1.40%)から伸びが加速するなど底入れの動きをみせているものの、中期的な基調は鈍化傾向が続くなど頭打ちを脱していない。公共投資の進捗や民間投資に底打ちの動きが出ていることを反映して建設部門の生産が底入れしたほか、年明け以降の米FRB(連邦準備制度理事会)による『ハト派』転換などをきっかけに国際金融市場の取引も活発化しており、サービス産業の生産も押し上げられるなどの動きがみられた。一方、世界経済の減速懸念に伴う外需鈍化を受けて精密機械関連や電気機械関連を中心に製造業の生産に大きく下押し圧力が掛かり、景気の足を引っ張っている。なお、同国政府は今年の経済成長率見通しを「1.5~3.5%」としているが、出だしはこの水準を下回るなど厳しい状況に見舞われている。

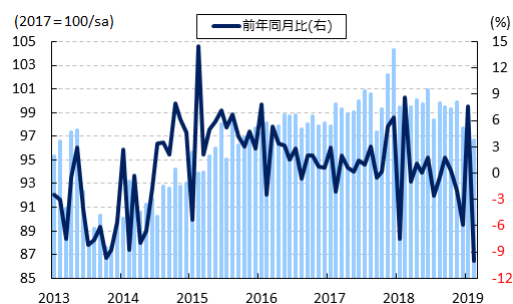
また、同日に発表された2月の小売売上高は前年同月比▲10.0%となり、前月(同+7.6%)から2ヶ月ぶりに前年を下回る伸びとなった。前月比も▲1.53%と前月(同+0.51%)から2ヶ月ぶりに減少に転じており、中期的な基調も減少傾向を強めるなど頭打ちしている。同国では月ごとの自動車販売が大きく振れる傾向がある上、小売全体の動向を大きく左右するなか、当月は前月比▲15.25%と前月(同+8.37%)から3ヶ月ぶりに減少に転じている。なお、自動車を除いたベースでは前月比+1.53%と前月(同▲1.11%)から3ヶ月ぶりに拡大に転じているものの、中期的な基調は減少傾向で推移するなど頭打ちしている。食料品など生活必需品に対する需要は底堅く、衣類をはじめとする日用品に対する需要に底打ち感が出ているほか、低迷が続いた宝飾品などの高額消費に対する需要も底打ちする兆しはうかがえるものの、余暇関連を中心とするサービス消費が弱含む展開をみせている上、耐久消費財関連の消費も全般的に弱含むなど基調は弱い。景気の先行き不透明感を反映して雇用にも頭打ちの兆候が出ていることも家計消費の重石になっているとみられる。

図2 SG 実質 GDP 成長率(前期比年率)の推移



(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

図3 SG 小売売上高の推移



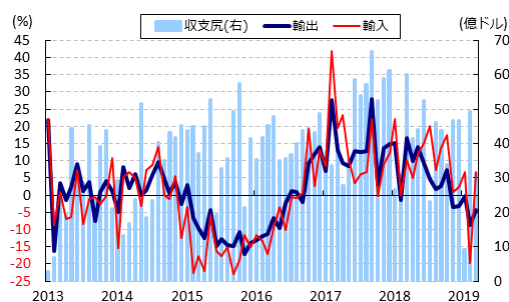
(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

### [台湾]～先進国向け輸出に底堅さがみられる一方、景気の先行き不透明感はインフレ圧力の後退を促す～

8日に発表された3月の輸出額は前年同月比▲4.4%と5ヶ月連続で前年を下回ったものの、前月(同▲8.8%)からマイナス幅は縮小した。前月比も+11.1%と前月(同▲5.2%)から3ヶ月ぶりに拡大に転じており、中期的な基調も拡大傾向に転じるなど底打ちを示唆する動きがみられる。国・地域別では、最大の輸出相手である中国本土向けは米中貿易摩擦の激化などが重石となる形で前年を大きく下回る伸びで推移するなど足を引っ張る状況が続いているほか、ASEANなどアジア新興国向けも引き続き前年を下回る伸びで推移する一方、堅調な景気拡大が続く米国向けをはじめ、日本やEUなど先進国向けが軒並み前年を上回る伸びに転じており、全体を下支えしている。財別では、IT関連財の輸出額が前年を上回る伸びとなるなど底打ちを示唆する動きがみられる一方、主力の輸出財である電子部品関連をはじめとする素材、部材系で軒並み前年割れの状況が続いている。一方の輸入額は前年同月比+6.6%となり、前月(同▲19.7%)から2ヶ月ぶりに前年を上回る伸びに転じた。前月比も+27.7%と前月(同▲24.0%)に大きく減少した反動も重なり2ヶ月ぶりに拡大に転じており、中期的な基調も拡大傾向に転じるなど底打ち感が出ている。輸出に底打ちの兆しが出ていることに伴い素材、部材関連の需要が下支えされたことに加え、年明け以降の原油相場の底入れも輸入額の押し上げに繋がっている。結果、貿易収支は+31.20億ドルと前月(+49.26億ドル)から黒字幅が縮小した。

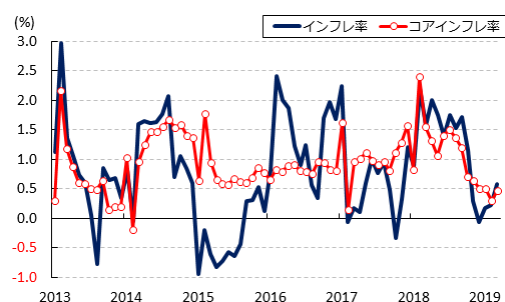
9日に発表された3月の消費者物価は前年同月比+0.58%となり、前月(同+0.23%)から伸びが加速したものの、5ヶ月連続で1%を下回る水準で推移している。前月比は▲0.62%と前月(同+0.99%)から2ヶ月ぶりに下落に転じており、年明け以降の原油相場の底入れなどに伴いエネルギー価格に上昇圧力はくすぶる一方、生鮮品を中心に食料品価格は下落するなど、生活必需品を巡る物価の動きはまちまちの状況にある。なお、生鮮食料品とエネルギーを除いたコアインフレ率は前年同月比+0.47%と前月(同+0.30%)から伸びが加速しているものの、前月比は▲0.71%と前月(同+0.89%)から2ヶ月ぶりに下落に転じており、ヘッドライン以上に下落傾向を強めている。幅広い財価格で上昇圧力が抑えられる動きがみられるほか、サービス物価も下落に転じるなど、景気の先行き不透明感などを反映して物価上昇圧力が後退している様子が見られる。

図4 TW 貿易動向の推移



(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

図5 TW インフレ率の推移

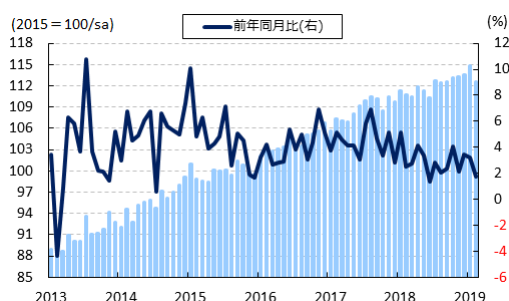


(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

### [マレーシア]～世界経済の減速懸念に伴う輸出鈍化を警戒し、幅広い分野で生産に下押し圧力が掛かる～

11日に発表された2月の鉱工業生産は前年同月比+1.7%となり、前月(同+3.2%)から伸びが鈍化した。前月比も▲2.01%と前月(同+1.20%)から6ヶ月ぶりに減少に転じており、中期的な基調も減少傾向となるなど頭打ちしている。世界経済の減速懸念の高まりを受けた輸出鈍化を反映して製造業で生産に頭打ち感が出ているほか、鉱業部門の生産に大きく下押し圧力が掛かり、公益関連の生産も鈍化するなど幅広い分野で減産の動きが広がりをみせている。製造業では、自動車をはじめとする輸送用機器関連で生産に底堅い動きがみられるほか、食料品関連など内需関連も同様に堅調な動きをみせる一方、主力の輸出財である電気機械関連や電子部品関連で軒並み減産の動きが広がったほか、化学製品関連などでも生産が弱含む動きがみられる。

図6 MY 鉱工業生産の推移



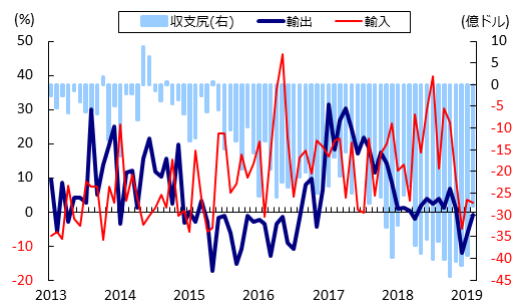
(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

### [フィリピン]～世界経済の減速懸念などが輸出の重石となる動きが続き、輸入にも下押し圧力が掛かる展開～

11日に発表された2月の輸出額は前年同月比▲0.9%と3ヶ月連続で前年を下回る伸びとなったものの、前月(同▲6.7%)からマイナス幅は縮小した。当研究所が試算した季節調整値に基づく前月比は2ヶ月連続で拡大しているものの、中期的な基調は減少傾向が続くなど頭打ちの状況を脱せていない。財別では、主力の輸出財である電子部品関連の輸出に底打ちの動きがみられる一方、機械製品関連や農産品関連の伸び悩みが重石となる状況が続いている。国・地域別でも、最大の輸出先である中国向けに底打ち感がうかがえるものの、ASEAN向けは鈍化傾向が続いているほか、日本やEUなど先進国向けの鈍化が全体の重石となるなど、世界経済の減速懸念の影響がくすぶっている。一方の輸入額は前年同月比+2.6%となり、前月(同+3.6%)から伸びが鈍化した。前月比は4ヶ月ぶりに拡大に転じてい

るものの、中期的な基調は減少傾向が続くなど輸出の頭打ちが輸入の足かせとなっている。結果、貿易収支は▲27.88億ドルと前月（▲39.20億ドル）から赤字幅が縮小している。

図7 PH 貿易動向の推移



(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

以上

本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命保険ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。